

## 基盤教育院の現状と課題

基盤教育院長  
足立 匡行

### I. はじめに

本学の建学の精神である「キリスト教主義に基づく国際人の育成」を実現するため、基盤教育院では「学生一人ひとりが自律した学習者として主体的な学びを可能とする基盤を身に付けるための教育を施す」ことを目標として、初年次教育を中心とした授業を展開している。大学進学率が5割を超え高等教育のユニバーサル段階に入った時代に、学生の主体的な学びを可能とするために必要な知識の基礎を教授し、大学生活はもちろんのこと生涯にわたる積極的な学びの姿勢を育成し、予測が困難といわれる将来的状況に対応できる能力を備えた、主体的に考え行動することができる人材を育成することが基盤教育院の役割である。

リベラルアーツという考え方を基本とした基盤教育院の創立に至る経緯については、畑山浩昭教授（学長特別補佐）の『基盤教育院の創設を振り返る』をお読みいただき、拙稿では(1)基盤教育院のカリキュラム概要、(2)外国語とフィールド教育を中心とした自律した学習者養成のための授業外活動、(3)基盤教育院独自の取り組み、という3つの観点から基盤教育院を紹介する。そして最後に基盤教育院の将来に向けた課題について述べることにしたい。

### II. 基盤教育院カリキュラム

基盤教育院が管理・運営している科目群は「コア科目」「基盤教育科目」「外国語科目」の3つに分類することができる。桜美林大学に入学した学生はどの学群に所属しようとも、1年次に「コア科目」（表1参照）と呼ばれる全学必修科目を履修することになる。コア科目は「キリスト教入門」「文章表現」「口語表現」「外国語（英語Ⅰ・Ⅱ）」「コンピュータ」の6科目、合計16単位で構成され、日本語を母語としない学生には「外国語（英語）」の代わりに外国語としての日本語を履修することが必須となっている。

「キリスト教入門」「口語表現Ⅰ」「文章表現Ⅰ」「コンピュータリテラシーⅠ」は週1回の授業を一学期間受講し「英語コアⅠ A・B」「英語コアⅡ A・B」はレベル別に分かれ

たクラスで週に4回の授業を春学期、秋学期を通じて一年間受講していくことになる。「キリスト教入門」の授業は講義科目であるため大人数で行われるが、他のコア科目に関しては1クラス25名を最大限とした少人数クラスで構成され、教員は学生一人ひとりと授業内での「対話」ができるよう心掛けている<sup>1</sup>。

前述した本学の建学の精神「キリスト教に基づく国際人の育成」を具現化するためには、キリスト教について学び、国際語である英語を習得することが重要となることは間違いのない。しかし日本を基盤として生活していくためには、英語に加えて日本語での読み書きが重要なことは言うまでもないだろう。日々変化する情報通信技術に関する知識や技能も国際社会で活躍していくためには身に付けなくてはならないもののひとつである。このように現在のコア科目は、建学の精神について学び、少人数クラスを通して能動的な学びの姿勢を育成し、「文章力」「対話力」「外国語力」を伸ばし、教養を身に付け、卒業時には桜美林大学の卒業生（オベリンナー）として、変化し続ける世界に対応でき得る基本的な知識と技能を身に付けた人材を育成することを目標としている。

表1：コア科目（全学必修）

授業科目	単位数
キリスト教入門	2
口語表現Ⅰ	2
文章表現Ⅰ	2
コンピュータリテラシーⅠ	2
英語コアⅠ A・B	各2
英語コアⅡ A・B	各2
日本語専門基礎 AⅠ	2
日本語専門基礎 AⅡ	2
日本語専門基礎 B	1

2つ目の科目群「基盤教育科目」（表2）は、「キリスト教理解」「コミュニケーションスキルズ」「アカデミックガイダンス」「フィールドスタディーズ」「学問基礎」「専攻入門」の6区分で構成されている。「キリスト教理解」「コミュニケーションスキルズ」科目は、コア科目で学んだ基礎を更に伸ばすことを目的とした発展科目である。「アカデミックガイダンス」「学問基礎」「専攻入門」では、各学問分野の基本的な考え方や最新の傾向、大学で学ぶための知識やスキルについての学習が可能となっている。また「フィールドスタディーズ」科目を受講することで学外研修に参加することもできる。

フィールドスタディーズでは2012年度より今までの6つのプログラム（地域学校パー

トナーシップ、異文化理解教育リーダー研修、国際理解訪問授業、多文化共生支援、不登校生学習支援、バイリンガル地域研究）に新たな4つのプログラム（地球にやさしい食と農、地域に根ざした福祉、災害支援とボランティア、わたしたちに身近な貧困）を加えることで更なる学習機会の充実を図っている。

表2：基盤教育科目

区分	授業科目	単位数	履修年次
キリスト教理解	聖書	2	1
	キリスト教と他宗教	2	1
	キリスト教と社会	2	1
	キリスト教と芸術	2	1
コミュニケーションスキルズ	コンピュタリテラシーⅡ	2	1
		2	1
	口語表現Ⅱ	2	1
	文章構成法	2	2
アカデミックガイダンス	リベラルアーツセミナー	2	1
	大学での学びと経験	2	1
	自己実現とキャリアデザイン	2	1
	キャリアデザインⅠ	2	3
	キャリアデザインⅡ	2	3
フィールドスタディーズ	語学研修	2	1
	国際協力研修	2	1
	海外企業研修	2	1
	国際理解教育	2	1
	自主研究	2	1
	地域社会参加	2	1
学問基礎	人文科学基礎	2	1
	社会科学基礎	2	1
	自然科学基礎	2	1
	学際・統合科学基礎	2	1
専攻入門	専攻入門	2	1

3つ目の「外国語科目」群（表3）には、英語を含む18の外国語（日本語は、日本語を母語としない学生のための日本語教育）の授業がある。外国語はレベル別に分けられてお

り、すでに特定の外国語について学習経験がある場合は、上級レベルからの履修も可能である。授業で学んだ言語を実際に用いるため本学の留学プログラムに参加したり、個人で休暇期間等を使い海外に出る学生も多くいる。海外研修等に参加し短期間で飛躍的に外国語能力が伸びた学生には「飛び級」（例えばレベルⅡを履修した次学期にレベルⅣを履修）の制度を用いて自分のレベルに合った授業を受けることができる。

英語学習に関しては、コアの英語とは別にエクステンションと呼ばれる授業があり、“Academic Writing” “Listening and Speaking” “Online Communication” など特定の英語力を伸ばす教育が行われている。これらに加えて Test of English as a Foreign Language (TOEFL) や International English Language Testing System (IELTS) のスコアアップを目的とした授業もある。また留学を希望する学生には留学準備授業 (“Study Abroad English”) も設けられている。

表 3：外国語科目一覧

アラビア語	イタリア語	インドネシア語	カンボジア語
ギリシャ語	コリア語	スペイン語	タイ語
ドイツ語	ビルマ語	フランス語	ベトナム語
ポルトガル語	ラテン語	ロシア語	英語
中国語	日本語		

桜美林大学では英語に加えて中国語と日本語教育も盛んだ。桜美林学園の前身である崇貞学園が創立者清水安三により中国に設立されたということもあり、中国語は大学創立当初から教えられている重要な外国語のひとつである。中国語の授業は「中国語と中国文化の普及を目的とする」中国政府の公的機関である孔子学院<sup>2</sup>との協力により運営されているという点で他大学とは異なる特徴あるプログラムといえる。

アメリカ、中国、韓国、台湾、タイ、チェコ、ベトナム、モンゴルなどからの留学生約 600 人が学ぶ桜美林大学のキャンパスでは、日本語学習にも力を入れている。日本語プログラムでは日本人学生（または先輩の留学生）が「クラスゲスト」<sup>3</sup>として授業に参加し、留学生たちの日本語の学びを助けるサポートを行っている。この「クラスゲスト」は、日本語教育という側面で重要な役割を果たしているのみではなく、本学の日本人学生と留学生との交流促進の役割も担っているといえるだろう。

ここで全ての外国語について紹介することはできないが、学生には桜美林大学での外国語学習を通して外国語の習得はもちろんのこと、異文化に触れ広い視野と複眼的な思考を体得することが期待されている。

### Ⅲ. 外国語とフィールド教育を中心とした自律した学習者養成のための授業外活動

桜美林大学での外国語教育は、教室内のみでの学習に限定されず、実際に学んだ言語を使用し交流する機会をもつことを奨励している。学生は基盤教育院が実施する海外研修や各学群独自の海外留学プログラムに参加し、大学で学んだ英語、中国語、コリア語、スペイン語、フランス語などを留学先での生活で実際に使うことで、更なる語学力向上を目指すことができる。研修によっては留学先の学生たちとの交流もあり、参加した学生のプログラムに対する満足度は高い<sup>4</sup>。

基盤教育院では約12の海外研修プログラムを実施しているが、ここではアメリカ合衆国とモンゴル国での研修について概要を紹介したい。アメリカで夏休みを用いて行われる「ボランティア研修」では、サンフランシスコにある保育園、老人ホーム、アニマルケア等で実習ができる。学生たちは違った実習先で同じ「アメリカ」という国に住んでいても異なる境遇に生きる人々と接することになる。参加する学生たちは、大学で学んだ語学力を駆使して実習を行うことで、語学の上達はもちろん、他者との接触を通して思いやりの心について学び、自分自身への理解を深めていくことになる。研修先によっては本学の卒業生が勤務している場所もあり、実社会で活躍している卒業生に直に接することは、学生たちにとって大きな刺激となっているようだ。

ウランバートル市にあるモンゴル文化教育大学で実施されている「モンゴル環境研修」では、現地大学生との交流を通じてモンゴルと環境問題（特にソーラークッカーの普及活動とトーラ川の環境保護ボランティア）について学習する。モンゴル語は現時点では正規の授業として受講することはできないが、このプログラムに参加する学生たちは出発前の事前指導でモンゴル語の基礎について学ぶ。滞在中には、遊牧民生活体験（ホームステイ）や乗馬体験も計画されていて、前述したアメリカ研修とは異なる学習機会をもつことができる。異文化で実際に生活することは、大学在学中はもちろん、卒業後の人生にも大きな影響を与える経験となっているようだ。

海外に出なくとも授業以外に多様な学習機会が準備されているのが本学の外国語教育の特徴のひとつといえるだろう。学而館4階にある Foreign Language Study Center (FLSC) では、英語、中国語、コリア語、フランス語、イタリア語など本学で学ぶことのできる外国語学習教材を貸し出している。また英語に関してはレベル別に約7千冊の本が準備されており、英語を受講している学生は一学期間に少なくとも5冊の英語書籍を読むことが学習目標とされている。授業時間以外で自主的な学習促進を支援する FLSC は、学生一人ひとりに「自律した学習」を勧める機会の一つとなっている。

基盤教育院ではFLSCでの教材の貸し出し以外にも、English Language Program (ELP)

の教員が中心となり、English Extra と呼ばれる英語活動（映画鑑賞、ディスカッション、読書会等）を通して、英語力の向上を目的とした活動が週3回行われ、また週2日の昼休みには、ランチを食べながら授業とは異なるリラックスした雰囲気の中で英語での会話を楽しむ“Conversation Circle”も実施されている<sup>5</sup>。

英語プログラムと同様に中国語プログラムと日本語プログラムも独自の活動を有している。中国語はリベラルアーツ学群生（中国研究会）と桜美林大学孔子学院が中心となり、学生のみでなく一般の人参加できる中国語広場を実施している。2012年度の中国語広場は「日本人大学生と中国人留学生が中国語会話を楽しみ、友達となれる場所を提供すること」を目標とし、中国研究会と日本文化言語学院（留学生別科）<sup>6</sup>の学生が共同で春学期と秋学期に5回ずつ（計10回）中国語広場を実施した。平均参加者数は約40名（春学期：計245名、秋学期：184名）で、参加者の9割超から「非常に満足している」「まあまあ満足している」の回答結果を得た。

日本語プログラムは、日本語学習リソースセンター（Center for Japanese Learning Resources: CJL）において、留学生を含む日本語を母語としない学生を対象に日本語学習支援を行っている。CJLでは、日本の書籍、辞書、小説、CD、DVDなどの日本語の学習リソースや日本語のパソコンを使用するためのマニュアルが準備されている。また学内外での留学生向けのイベント紹介も行っている<sup>7</sup>。

ここまで見て来たように、桜美林大学では授業外にも国内外で多くの学びが可能となっている。積極的にこれらの学習機会を活用することで、学生たちは自律した学習者としてグローバル化された社会で生き抜く術を学んでいくことになるのだ。

#### IV. 基盤教育院におけるプロジェクト

基盤教育院では海外研修や学内での学びの提供以外にも、その設立時より独自のプロジェクトを実施してきている。プロジェクトの活動内容には様々なものがあるが、ここでは主に3つのプロジェクトに焦点を当てて紹介する。第一に挙げられるのは、本学の学生が主役となっている「学生サポーター」の存在である。「学生サポーター」は、全ての桜美林大学生のサポーター役であり、本学で学ぶ全ての学生が、充実した大学生活を送れるよう企画を組んだり、学習・就職面での相談にのったりすることが主たる業務となっている<sup>8</sup>。

2011年には、学生サポーターが中心となり茶道部の協力を得てイベント「七夕祭り」を行った。参加した留学生たちは浴衣を着て写真を撮ったり、他の学生との交流を通して充実した時間が過ごせたようである。2012度には「就活！座談会」を開催し、内定が決



まった学生たちとくつろいだ雰囲気の中で就活について話し合う企画を実施した。

これらのイベントに加え、学生たちは毎年、学生のための『ハンドブック』を発行している。この「持ち歩けること」を想定し作成されハンドブックは、学生の視点から学内施設情報や学内のお勧めスポット等を紹介し毎年好評を博している。学生サポーターたちは定期的な教職員との会議に加え、サポーター育成のための講座や年2回の研修会に参加し、サポーターとして採用されたのちにも研修を重ねることになる。

第二は日本語に関係するプロジェクトである。2011年度より基盤教育院では韓国京畿道外国語教育研修院より韓国で日本語を教えている中学校・高等学校の教員を約一か月間受け入れ研修を行っている。2011年度には12名の教員が、2012年度には10名の教員が参加した。この韓国からのプログラムは、教員を対象としたものであるが、学生を対象とした研修も数多く実施してきている。過去には明知大学（韓国）、The University of Texas at Austin、The University of North Carolina at Charlotte、University of Hawaii at Manoa から学生を受け入れ短期研修が行われた。2012年度からは北米における提携校からの学生を対象とした日本語研修（北米型サマープログラム）が始まっている。これらの研修参加者は、今後、桜美林大学と世界をつなぐ懸け橋となってくれることだろう。

紙面に限りがあるため、最後に『OBIRIN TODAY』（2011年 Volume 11）でも紹介したフィールドスタディーズの「その後」について追記したい。2011年3月11日の東日本大地震の後に被災地援助を目的の一つとして基盤教育院サービス・ラーニング・センター（Service Learning Center: SLC）がフィールド教育部門内に設置された。SLCでは、牧田東一センター長を中心に、震災直後から現在に至るまで継続的に被災地支援を含めた様々な社会活動を行っている。

震災後に被災者支援センターが設立された日本基督教団東北教区被災者支援センター「エマオ」<sup>9</sup>には、2012年本学から約91名の学生がボランティアとして参加している。また連携大学12校からなる東北学院大学を中心とした大学間連携プロジェクト（気仙沼プロジェクト）にも学生12名、教職員11名の計23名が参加している。SLCでは、現地に教職員を派遣するのみではなく学生たちが中心となり「学生ボランティアによる震災ボランティア報告」、「キャンパスでの講演会」、「大学祭での特別展示」、「勉強会」、「写真展」など活発な活動を続けている。また2012年度にはSLCインフォメーション・スペースを開設し、より多くの学生にボランティア活動や社会活動に関心を持ってもらえるよう活動をしている。桜美林大学に入学した学生は「学而事人」（学びて人に仕える）の精神に基づき、大学での学びを社会に還元することを実践していることがこれらの取り組みからも理解できるはずだ。

## V. 将来に向けた課題

ここまで基盤教育院の現在のカリキュラム概要、外国語とフィールド教育を中心とした自律した学習者養成のための授業外活動、基盤教育院独自の取り組みについて紹介してきたが、最後に将来に向け基盤教育院が取り組んでいる課題について言及したい。第一の大きな課題はカリキュラム改革である。基盤教育院ではリベラルアーツ学群と協力しながらカリキュラム改組に取り組んでいる。目標のひとつはコア科目を中心に全学に向けた学びの礎を築きあげる初年次教育のより良いカリキュラムの構築にある。カリキュラムの見直しは、今後、リベラルアーツ学群のみではなくプロフェッショナルアーツの芸術文化学群、健康福祉学群、ビジネスマネジメント学群からの協力も得ながら達成していくことを計画中である。

第二の課題は就職に関するより強固なサポート体制の確立にある。就職難が問題となっている現在では1年次から社会に出た自分をイメージし進路について熟考する機会が必要となる。基盤教育院では1年次から「キャリアデザイン」と呼ばれるキャリア関連の科目が受講できる。この授業は卒業後の自分を想像することで4年間をどのように過ごすべきかを考える恰好の機会を提供している。また3年生を対象とした「自己実現とキャリアデザイン」では実際の就職に向けた準備（エントリーシート作成方法、面接準備、企業研究、適性検査等）を行い、就職活動のサポートを行っている。今後は授業内容の精査と配当年次の見直し等について更に議論していく予定である。また2012年度からは留学生用の3年生向け授業を開講し、日本で生まれ育った学生たちとは異なるニーズを持つ留学生への就職サポートを積極的に行っている。この留学生用の授業は、今年度の実績を考慮して、今後につなげていく予定である。

第三の課題は語学教育の更なる充実にある。語学関係では2013年度より外国語教育 départements の専任教員が中心となりライティングセンターを設立し、英語と日本語（日本語を母語としない学生たちを対象）を対象とした書く技術を高めるためのサポートを実施する。センターを利用する学生はチューター（指導員）とのやりとりを通して、文章の構想、構成、語句や表現、文法などについて学び、書く力の向上を目指す。センターでは「自立した書き手を育てる」という基本方針の下、学生の文章表現スキルを高めることを目的としている。

ライティングセンターの開始とともに、語学力の向上を継続的に学習者自身にも把握してもらうため‘eLanguage Portfolio’の活用も検討している。学生はウェブ上の‘eLanguage Portfolio’に自分が書き上げたレポートや論文、学習記録等を全て保存し、時間を追っての自分の進歩を自ら把握できるようにする。つまりライティングセンターは「書きのプロ



セス」を、‘eLanguage Portfolio’では「成果」の認識を通して書く力を含めた語学力全般の向上を図ることになる。

ライティングセンターと‘eLanguage Portfolio’で学生の語学力を伸ばす努力をする一方で、各言語での学習結果を明らかにするため公的試験<sup>10</sup>等を用いた客観的評価の導入を継続して実施していくことも必要だ。このような公的試験の導入により、学生一人ひとりが語学における進捗度や成果を自分自身で理解できるのみでなく、学習結果を社会に向けて発信することもできるのだ。

公的試験の積極的な導入と並行して、すでに数年かけて議論が続けているが、各外国語でレベル別の到達目標をより一層明確にすることも急務となっている。具体的には各レベルの修了時には、公的試験ではどの程度のレベルに達するのかを明らかにすることが望ましい。またヨーロッパ言語参照枠（Common European Framework of Reference for Languages：CEFR）などを参照として独自の基準を設けていくことも考えられるのではないか。このようにレベル別の学習結果を明確化することは、学習者である学生が達成度を客観的に確認できるのみではなく、より明確な目標を持ち外国語学習に取り組むことを可能とするだろう。

ここまで、より良い教育の提供を目的として基盤教育院が取り組んでいる3つの課題（カリキュラム改革、就職教育、外国語教育）について言及したが、これらの将来計画は基盤教育院のみで完結するものではない。これらの課題は、各学群、事務組織との密な連携、協力があって初めて実現できることになる。1年次授業の大半を占める基盤教育の充実、大学生活全般の満足度も高めることになるはずである。

## 注

- 1 講義科目も演習等の少人数クラスと同様、リアクションペーパー等を用いて個々の学生との密なコミュニケーションを心掛けている。
- 2 孔子学院については桜美林大学孔子学院 <http://www.obirin.ac.jp/kongzi/> 参照。
- 3 クラスゲストに関しては [http://www.obirin.ac.jp/jf\\_oberlin\\_education/face\\_world/international\\_flavor/class\\_guest.html](http://www.obirin.ac.jp/jf_oberlin_education/face_world/international_flavor/class_guest.html) 参照。
- 4 現在実施されている海外プログラムについては『2012-2013 国際交流と留学』（学生センター国際学生支援課）を参照。
- 5 elpweb homepage： <http://elpweb.com/homepage/> 参照。
- 6 日本文化言語学院（留学生別科）： [http://www.obirin.ac.jp/japanese\\_extension/index.html](http://www.obirin.ac.jp/japanese_extension/index.html) 参照。
- 7 桜美林大学日本語学習プログラム： <http://www7.obirin.ac.jp/nihongo/program/index.html> 参照。
- 8 この学生・教職員協働プロジェクトは、「学修アドバイザー」として始まり、2010年度より「学生

サポーター」と改称した。この改称は今までの履修相談中心のサポートから学生生活中心のサポートへの転換を意味している。基盤教育院コーナーストーンセンターでは主に古川健二係長、松久保暁子講師が中心となりコーナーストーンスタッフの奥村麻美氏、原絵美氏の協力を得て運営がなされ現在の基礎が作られた。このプロジェクトは2013年より大川原裕司課長と秋元英佑氏に基盤教育院教職員が協力する形で引き継がれている。

- 9 日本基督教団 東北教区センター エマオに関しては <http://www.uccj.jp/> 参照。
- 10 アラビア語検定、実用フランス語技能検定、ドイツ語技能検定、実用イタリア語検定、スペイン語検定試験、ロシア語能力検定、実用中国語技能検定、韓国語能力試験、インドネシア語技能検定、実用タイ語検定、Test of English as a Foreign Language (TOEFL<sup>®</sup>), International English Language Testing System (IELTS<sup>™</sup>), Test of English for International Communication (TOEIC<sup>®</sup>) 等が公的試験として考えられる。

## 参考資料

- 中央教育審議会大学分科会 大学教育部会 (2012)「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える」  
[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_\\_icsFiles/afiedfile/2012/04/02/1319185\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afiedfile/2012/04/02/1319185_1.pdf)
- 学生センター国際学生支援課 (2012)『国際交流と留学』 桜美林大学
- 孔子学院事務室 (2012)「2012 年度中国語広場実施報告書」 桜美林大学
- 文部科学省 (2011)「大学改革実行プラン～社会の改革のエンジンとなる大学づくり～」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/24/06/\\_\\_icsFiles/afiedfile/2012/06/05/1312798\\_01\\_3.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/06/__icsFiles/afiedfile/2012/06/05/1312798_01_3.pdf)
- 桜美林大学教育支援課 (2012)『講義案内』 桜美林大学
- 桜美林大学外国語教育デパートメント (2012)「ライティング・センター設立について」 桜美林大学